

第2章 本（書物）が果たす役割と公共図書館の必要性

2.1 書物（書き物）は、人生の役に立つのか

人生において書物（書き物）との出会いは、何の役に立つか

まず、この大命題について考えを巡らせることから、検討委員会報告は始めます。

世の中には、様々な書物が存在しています。身近な書物といえば毎日の情報を与えてくれる新聞、子どもたちがはじめて手に取る絵本、そして多くの人々が触れる本や雑誌、記録物。現在では電子書籍という紙媒体ではない書物の形も生まれています。どのような形であれ、書物は多くの人々の身近に存在しています。

テレビ、ラジオからも、様々な情報（以下「電波情報」という）を得ることができます。書物と電波情報との違いは何でしょうか。

ここで気をつけていただきたいことは、電波情報も記録（ビデオ化・DVD化など）されると、多くの人々が時空を超えて見ることができるものへと変化し、書物ならぬ記録物へと変化します。記録されない電波情報は、そのままでは時空を超えて伝えることができないばかりか、繰り返し見ることができない、流される情報に対していったん立ち止まって考えを巡らすことができない情報といえます。

書物は、多くの人々が時間と空間を超えて触れることができる、自分以外の人々の「考え」「思い」「知識」だといえます。

自分以外の人々の「考え」「思い」「知識」を知ることが、人生にとって何の役に立つのでしょうか。それは真っ暗な中で自分の姿を見ることができないように、自分の「考え」「思い」「知識」が正しいのか間違っているのかを判断する材料を見つけることができない状態と同じです。「他人を知って、己を知る」ことができる術ともいえます。書物には、書いた人が置かれた社会を背景として「考え」「思い」「知識」が書（描）かれています。それは、自分以外の誰かが書（描）いたものであり、それらを読む・見ることによって自らを見つめ直すきっかけにつながっていきます。これは何も日本に生きる同時代の他の人々の「考え」「思い」「知識」を得ることだけではありません。歴史的な記録物からは、過去の人々の「考え」「思い」「知識」を、世界に目を向けると異国の人々の「考え」「思い」「知識」を得ることができる、まさに書物は時空を超えた人々から様々な考え方、思い、そして知識を得る術（方法）だといえます。

【書物は、人生に役立つのか】

- 書物は、自らの存在を見つめるために、時空を超えた多様な「考え」「思い」「知識」を得る術（方法）

2.2 書物との出会い

書物との出会いは、ひとそれぞれです。絵本、マンガ本、文学書、教科書さまざまな形で目に触れ、ときに心に触れていきます。こう考えると書物に触れない、触れたことがない人はいないのではないのでしょうか。好むと好まざるとに拘わらず、どこかで書物を見、触れているはずです。どのような書物でもストーリーがあり、文字があり、また時には絵や写真があります。これら全てを身体で知覚し、書かれていることを理解していきます。しかし大事ことは、書物は、自分以外の人・ひとが創った「考え」「思い」そして「知識」を知り、そして自分の思考をめぐらせ、時には生き方を考える手段であるということです。

だからこそ、できるだけ早くこのことに気づき、気づかせてあげることが、大人としての役割ではないでしょうか。子どもたちに、できるだけ早く書物のもつ人生での役割を伝えることが大切です。しかし、これは幾つになっても構わないといえまかまいません。気づいた時に、できるだけ多様な書物に触れる場があること、その場を確保することこそが大切だといえます。

柔軟な考え方を育てること、それが独創性を生み出し、明日への生きる活力を生み出します。子どもたちは、書物を手にし、読み、そして書き手が描いた情景とは、また異なる自らの情景を創り出します。まさに、想像力を育てることになります。想像力の欠乏が、時に考え方の幅を狭め、対応能力が低下し、現代のストレス社会につながっているともいえます。

子どもたちが、書物に触れるということは、自らイメージを創り、それを少しずつ膨らませて、想像力を養い、考える幅を広げ、生きる希望と活力を持たせること

子どもたちは、あれこれ手にとって本を選び、何冊かを読む。それを全部読むかといえそうではない場合もあります。手にした本が面白くなかったり、難しかったりするとそこで読むことをやめる、それでもよいのです。

読まなかった本が無駄かといえそうではありません、読めなかった本があるからこそ、読んだ・読むことができた本の評価が自ずと身についていきます。子どもたちはそれなりに本を選ぶ“力”を身につけていくことで成長するものです。

本を読むことで、思考力・想像力・忍耐力が自然と身に付いてきます。本を読んで想像し、自分で具体的な情景を創る“想像する力”を身につけることができるのです。

子どもたちは、好奇心にあふれ、気軽に多くの本に触れ、読める環境があれば、豊かな想像力を持った人間として成長していくもの

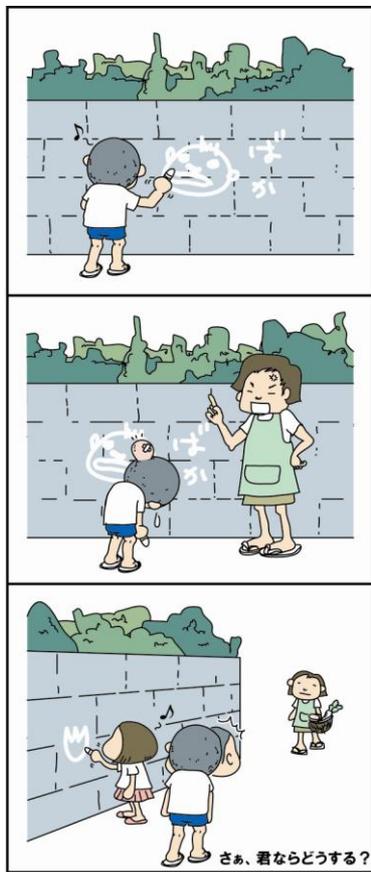
一方、大人は、「他人を知って、己を知る」「無知の知」に至る。自分の得意分野、興味のある分野を深く掘り下げたり、自分の知らない世界のことを書物によって知り、人としての思考回路、自らの世界観を広げ、知恵を出し社会へ貢献していくことができるのです。

大人になっても、書物との出会いによって成長して行くもの

【コラム】

■過去の人々の「考え」「思い」「知識」を知ること

過去の「考え」「思い」「知識」を知ること、それは過去の人々の「経験」を知ること。「未来を見て生きる。過去は振り返らない。」という方がいます。本当にそのような生き方ができるでしょうか。交通法規、刑法、今まで生きてきた経験を振り返らず、この世の中で生きていくことができるでしょうか。述べるまでもなく、できません。なぜならば、この世の中に存在する生き物は経験を活かして、未来を築いていくものだからです。過去の「考え」「思い」「知識」を学ぶこと、それは歴史を学ぶことです。歴史を学ぶことは、年号を覚えることではありません。それは過去の人々の経験を学ぶことです。良い経験（成功）、悪い経験（失敗）を知り、自らの生き方（未来）を想像し描き、そして実現していくことです。



■過去（経験）を伝えるということ

- 壁に落書きをしていた太郎

- 母ちゃんに見つかり、たいそう怒られ、ゲンコツまでくらった。イテ～っ

- ある時、お兄ちゃん思いの妹のさくらが、同じように壁に落書きをしているのに出会った。ふと、向こうをみると母ちゃんが帰ってきている。さあ、あなたが太郎なら、どうする、どうする。

【提供：基山の歴史と文化を語り継ぐ会】

2.3 公共図書館は必要か

(1) たくさんの書物に触れるために

たくさんの書物に触れる場は、私たちの身近なところでは書店、そして図書館があります。書店は、多くの書物を取り揃え身近に触れることができます。しかし、そこには対価として金銭を支払わなければ、書物を持ち帰り読むことはできません。一方、図書館は、多様な資料を情報として人々に提供するための施設です。登録さえすれば誰でも書物を借り出し、持ち帰って読むことができます。図書館から持ち出しを禁止されている書物でも、図書館内での閲覧は可能です。

また自分に合わない、読みこなせない書物を取り替えることができます。今では、身近な図書館から遠くの他の自治体の図書館が持つ書物を借り出す仕組みも作られています。

図書館は、なによりも無料で多様な書物に触れることができ、読むことができることが大きな利点でしょう。

【生活の中の図書館】

図書館は、人々の日常生活の延長線にあるものです。

図書館は、書物の情報を提供することによって生活を支援する施設です。知識や趣味など読書の楽しみだけでなく、学問や生活における疑問や知りたいこと、仕事や人生における様々な問題に対して情報提供で応えることができるのが図書館です。

また、図書館は、生活の一部であり、利用者の中には毎日図書館に来る人もいます（毎日の生活サイクルの中に含まれている）。

人々の生活の中であって、人々の役に立つ図書館は、まず人々の身近にあれば利便性は高まるでしょう。多くの人々が歩いて行ける範囲にあることが理想であるといえます。

- 図書館は、身近に書物に触れる場。
- 図書館は、日常生活の延長線にあるもの。

【参考】

昨年（平成24年12月）、合同創作劇「こころつないでー基肆城に秘められたおもいー」が上演されました。これは、基山町の小中学校の生徒とボランティア・スタッフの協力により、基山の宝である基肆城の成り立ち・歴史について勉強し、当時の時代背景などを生徒がそれぞれ一人一人学んで自分で創造し、その人物になりきり演出した創作劇です。

生徒たちは、何回も台本を読み、その人物になりきり見事な演技をしていました。また、当時の歴史、生活環境などについて、図書館などでいろいろ調べ勉強していたとのこと。

(2) 様々な媒体による書物

現代の書物は、紙、電子データなど様々な媒体によって人々の手元へ提供されています。それぞれ利点と欠点があり、どの媒体が活用するにあたって望ましい姿かは、その時々で異なっています。利用する方々が考え、活用することが大切です。

しかし図書館は、時空を超えて自分以外の「考え」「思い」そして「知識」を書物という形で知ることができる施設です。すべてを電子化することも今では可能でしょう。しかし書物も、実は書（描）かれている情報とともに、作られたモノとしての情報も持ち合わせています。例えば、和綴じという技法によって編まれた書物、中性紙という劣化し辛い紙で作られた現代の記録など、その時々の製本技術を知るモノという情報を持ち合わせています。

すべてを電子化し、いつでもどこでも入手でき読むことができる電子データ化も必要ですが、この製本という技術を知ることができるモノとしての書物を、この世から消し去ることは、多様な情報をこの世から消し去ることと同義なのです。

そして、私たちは、電子化された情報と紙に記された情報のそれぞれの利点を、知らず知らずに使い分けていることに、あまり気づいていません。

電子化された情報は、検索という形で即座に入手したい情報を一対一対応で得ることができます。これに対し、紙に記された情報は、紙全体に「目配り」し必要な情報とともに、「おまけ」のような情報を得ることを可能にします。

【参考】

毎日の情報を提供してくれる新聞を例に説いてみましょう。電子データとしてネット配信されている新聞情報と毎日配達される紙に印刷された新聞情報を比べてみてください。紙に印刷された新聞の情報に、「おまけ」として入手する情報量が多いことに気づかれるはずです。

このように、どちらか一方に傾倒することも、等しく情報入手の幅を狭めてしまうことにつながり、その時々で利便性を十分知り、活用することが今求められているといえます。

公共図書館は、時空を超えた資料を保管する施設であるという点が見過されています。個人により収集された書物は、購入した本人の価値観に偏りそして生涯とともに、多くは消えていくものです。しかし、公共図書館は、この時空を超えた多様な書物を保管できる施設です。また、そうでなければ今まで記してきた書物のもつ人生での役割を支えることができないものになってしまいます。

- 書物は、書（描）かれた情報と作られた情報の二つを知らせてくれる
- 公共図書館の役割は、時空を超えた書物・資料を保管し活用する施設である

2.4 付加価値を創造できる図書館

図書館は、これまで述べてきたように、時空を超えて自分以外の人々が記した「考え」「思い」そして「知識」を知得して、自らの存在・考えを見つめ直すために書物に出会う場です。しかし、公共図書館には、単にこれだけを求めるのではなく、町民の多様なニーズに応えることが、いま公共サービスに求められています。このことを考えると、付加価値を創造できる場としての図書館が求められているのです。

「費用対効果」という言葉に表現されているように、図書館を運営する費用を単に書物に触れるだけに費やすのではなく、図書館が存在することで創造される付加価値を如何に増加させるか、また増加させることができるのかが、これからの図書館には求められているといえます。

【参考】

付加価値とは何でしょうか。

「○学ぶ、○調べる、○楽しむ、○憩う、○集う、○つながる」という行為だけでなく、「○複合的、○ついでに、○常に、○気軽に」という形容的な用語も付加されることも併せて求められています。

例) 複合的に学ぶ。ついでに集う。常につながる。など

現在の図書館が提供しているサービスより、多くのサービスが提供できるようになること。

図書館を建設することで、より多くの付加価値が創造できる。

- ・生活動線上に建設することで利用者が多くなる
- ・多くの図書館サービスを提供できる空間
- ・子どもや高齢者などが歩いていける場所

言い換えると、できるだけ多くの付加価値が創造できる場に、図書館の建設場所が選ばれることが望ましいといえます。

できるだけ多くの付加価値が創造できる場に、図書館の建設場所が選ばれることが望ましい